

鳥語 53

2006

詩 評論 小説



鳥語社

鳥語⁵³

2006年11月15日

目次

詩

人形師

六月の唄

三浦玲子 2

小説

わかやぎ

水に降る雪

待合室

菜の花の呪文

23歳・秋

生田幸平 8

岩田孝子 16

蔭山辰子 56

左近育子 77

東築史樹 89

エッセイ

死んではいけない

木下蘭子 73

同人・会員住所録

編集後記

15

106

菜の花の呪文

左近育子

改札口を出て駅前広場に立った裕介は、大きく息を吸い込んで空を見上げた。

冬の名残りで空気はまだ冷たかったが、春を思わず明るい日差しが全身を満たした。

以前、駅に降り立ったときは、冷たい雨が降っていた。葬儀に向かう悲しい心に、晩秋の雨の冷たさは一層身に染みた。とても寒い日であった。

あれから三年、忙しさにかまけてこの地には足を向けなかったが、亮太のことが気にならないわけではなかった。その後どうしているかと思いつながら、仲間たちと立ち上げた会社の発展のために、日夜時間を惜しんで働いて来た。大学を出て大手商社に就職して三十五年、長年の海外勤務もしたが、無事定年の日を迎え退職した。

定年後は、在職中の経験を生かして同僚と小さな会社を立ち上げた。リサイクル関連の事業だが、時代の要求もあって、事業は順調に伸び、四人で始めたのが、五年経って三十人の従業員の企業になった。忙しさにかまけて、特急で三時間足らずの郷里には足を向け無かった。

商社に勤務中も海外に居ることが多かったので、何事がない限り郷里に足を向けることは少なかった。父親が死んだとき、父親の残した織物工場を継いだ兄が倒産自殺したとき、悲しい時ばかり戻って来たように思う。

秋雨の降る駅に降り立った三年前もそうだった。そのと

きは幼友達の亮太の息子夫婦が死んだときだった。

二日続きの秋雨の葬儀はあまりにも悲しすぎるものだった。一度に二人を亡くし、老いた肩を激しく震わせて鳴咽する亮太の声は悲鳴にも似ていた。重く冷たい空気を引き裂く声は、裕介の心の中にいまもはつきりと残っている。駅前広場を斜めに進むとバス乗り場がある。色鮮やかな花壇を横に見ながらバス停に立つと、目の前に五階建ての市庁舎が見えた。

むかし木造の小さな役場があった所だ。静かな田舎町だったのが、ここ二十年の間に山林の宅地造成で、大都市から大勢人が流れ込んで来ていた。

いつのまにか町は市になり、小さな各停駅が急行の止まる駅になっていた。

長いこと郷里を離れている裕介は、来る度に変貌している町の姿に驚かされてきた。

バスに乗り込み十五分ほど行くと、町並みからはずれて急に懐かしい景色になった。S字状に流れる川沿いを右に山並みを眺めながら走るバスは、幼いころの記憶を蘇らせてくれた。あたりがどのように変わろうと、山と川の変化は揺るがないものだ。と裕介は感動しながら、移り行く景色を車窓から眺めていた。

小学生のころ、幼友達の亮太や健一とすっ裸でよく川を泳いだ。K鉄道がT川を渡る鉄橋の橋脚によじ登り、頭の

上を通過する電車の轟音と振動を楽しんだり、そこからダイビングして水面に飛び込んだりしたものだ。堤防を競って転げ落ちたり、草むらに潜む蛇を棒でたたき出して殺したり墓地の供物を盗み食いたり、悪がき三人組と言われていた。あれから何十年たつたろうか。亮太に会いたいと思ったのは、一週間前だった。急に亮太を思い出したと言う訳ではない。

息子と嫁を一度に失い、残された幼子を老いた手で育てなければならなくなった亮太を、どう慰めどう救ってやればいいのかわからなかった。手紙で励ましはしたものの、彼の顔を見るのが辛くて、正直なところ彼を避けて来た。どうしているかと何度も思っていたが、忙しいのをよい口実に郷里に足を運ばなかったのだ。

そんな自分が、急に彼に会いたいと思ったのは、あまりにも身勝手考えからだ。医者にガンを宣告されたからであつた。そうでなかったなら、自分はおも彼を避け続けたかもしれない。そう思うと自分の身勝手さに呆れもし腹も立った。

半年前ごろから胃の調子が悪く、喉に違和感があつた。仕事で忙しくてそのままにしていたが、いよいよ食事が喉を通らなくなつて来たように感じられ、思い切つて病院に行った。かつて大腸ガンで手術をした病院だった。その時は初期ガンということで命にかかわることはないと言われ、

転移もなく五年間何事も無く元気だった。健康を取り戻したと思い、定年後も新しい人生を切り開いてきたつもりだった。食道に転移が見られ、食道の三分の一は削除しなければならぬと、医者はメガネの奥から見据えるように言った。容赦の無い言い方だった。五年間の無事を喜んだのは何であつたのか。裕介は体が真つ二つに割れたような衝撃を受けた。即入院を言い渡されたが、仕事の引き継ぎやら整理があるので、二週間後の入院を約束して帰宅した。妻はうろたえ泣きながら定年後もあくせくしてきたことを責め立てた。のんびりと定年後を過ごしておればよかったかと後悔もした。入院してガンを切除したところで、短くなった食道に無理やり胃を引っ張り上げて繋ぐのでは、食事もうまくはないだろう。生き延びるために細々と食べ物を流し込むだけの人生になるのだ。そう思うと手術に立ち向かう恐怖よりも空しさの方が強かった。同期四人で始めた仕事だが三人に任せて身を引こう。覚悟を決めて仲間に事情を話すと、気は若いが体はお互い年相応でことじゃないか、お互いいつ何が起きるか覚悟して居なければならぬという結論になり、いつでも復帰できるようにと恩情ある言葉をもらったが、もう二度と仕事など出来まいと裕介は思った。そう思うと無性に亮太に会いたいと思つた。心が弱っている。空しさと悲しさが全身を被つ

た。いまのうちに彼に会っておかなければ、もう二度と会えないかも知れないという一抹の恐怖が思いを駆り立てた。犯罪者は追いつめられると故郷に行き、親や親友、幼友達に会いたい心境になるという。いま裕介はそんな心境になっていた。人間はなんて身勝手な動物なんだろうか。悲しみと寂しさの中で必死に生き続けている亮太に何一つしてやれなかったのに、自分が弱くなり追い詰められると救いを求めたくなつた。身勝手な自分を責めながらも、ここまで来てしまつた。

彼に何を求めるわけでもないが、会えば心が安らぐように思えた。

バスの車窓から見えるなだらかな山並みは、昔と少しも変わっていない。車道に沿って流れる川は昔のように清らかな流れではないが、平野を縦断していく曲線はゆつたりとしていてのどかである。山裾には住宅が立ち並び大型スーパーなどもあるようだが、空の広さも空気の匂いも懐かしい。この景色を脳裏に焼き付けておこう。これが生まれ育つたところだ。思い出が体の奥に染み込んでいる場所だ。裕介はやや感傷きみになっていた。

次ぎはツバキ神社前、マイクで知らせる停車場の名にはつと気づいて、裕介はあわててブザーを鳴らした。あれこれ思い出して、つい乗り越してしまうところだった。バスを降り立つと、微風が田舎らしい藁のにおいを運んで

くれた。はこべの白い小花やイヌノフグリの水色の小花が咲いている小道を行くと、目の前にこんもりと森が見えた。名のとおりツバキの木立に包まれた神社の鳥居が、口を開けたようにそこにあつた。

小さな神社だが、子供の頃には大きなお宮様と思つていた。亮太はその神社を守つてゐる神主の息子だつた。日ごろは社殿の屋根に伸びた大きな楠の木によじ登つたり、ツバキの繁みを揺すつて参拝者を驚かせたりしてゐた亮太だが、氏神さまを祭る一年に一度の祭りの日は、父親の烏帽子をつけた神主や二人の神官の後ろに尋常に従つて、白い装束に身を包んでサカキをうやうやしく捧げていた。祭りのときだけ出る屋台で綿菓子を買ひ、リンゴ飴をなめながら神事の行列を見ていた裕介と健一は、亮太の真面目くさつた姿を眺めてゲラゲラ笑つたものだつた。そのためだつたらうか、神官になるのを嫌つて父親の後を継がなかつた亮太だが、何十年もの紆余曲折を辿つた末、いまは神社を守つてゐる。

ツバキの繁みにおおわれた石畳の参道は、薄暗くひんやりとしていた。ぼたりと音立てて落ちたようなツバキの花びらが幾つも散らばつていて、暗い石畳を赤く染めていた。樹齢百年を越えるツバキは、何十本もが重なり合い空を隠していて、時折吹く春風に揺れる葉擦れの音の中から、木漏れ日がかすかに光つて参道に降りて来た。赤いゴム毬が、突然どこからともなく足元に転がつて来た。裕介が驚いて

立ち止まると、幼い女の子がきよんとした目をしてそこに突つ立つていた。

ゴム毬を拾ひ上げ、笑いながら手渡そうと思うと、幼子はいきなりクルリと背を向けて、叫びながら走り去つた。

「じいちゃん、だれがいるよ。こわいおっちゃんや」

裕介は苦笑し、ゴム毬をもてあそびながらゆつくりと神殿に向かつた。

繁みを抜けて神殿の前に出ると、先刻の幼子がしきりに白髪の老人の手を引っ張つてゐた。

「なんじやい、裕介じやないか。どうしたや知らせもせんでいきなりくるなんて」

亮太が驚いた顔をした。

四十近くなる息子に嫁の来手がないと嘆いてゐた亮太が、うれしい便りがきたのは五年前であつた。

やつと息子が嫁を貰うことになった。結婚式にはぜひ来てくれという手紙だつた。携帯電話も使えない、ましてパソコンでメールなど出来ない亮太は、いつも和紙に毛筆の手紙をよこした。時代遅れと言え言えなくもないが、彼の字は達筆で和紙の似合う字だつた。さすが神官の息子だけある。古式豊かなことだとおだてたことがあつたが、亮太はそれを喜々としてゐるのではないかと思えるほど筆まめであつた。招待状がきたが、当日は定年後に立ち上げた会社の発会式と重なつたため来れなかつた。祝電と多めの祝い金

を贈ったが、息子の嫁の顔をとうとう見ずじまいになった。

一年後に孫が出来たと便りがあり、亮太もこれで楽しい老後が過ごせるだろうと安心して矢先の訃報だった。

嫁の父親が肺ガンで余命三カ月と聞いて、息子夫婦は子供を見せに嫁の実家のある田舎へ行った。その帰り道に交通事故に出会ってしまった。

高速道路の反対車線を行っていた筈の大型トラックがいきなり中央分離帯を乗り越えて、正面から突っ込んで来て、夫婦の車に衝突した。運転台は大破して酔っ払いの相手の運転手も息子ら夫婦も死んだ。そのとき後部座席のチャイルドシートにくくりつけられていた十一カ月の光子ちゃんだけが助かったのだ。

葬儀の日、親戚に抱かれて無心に眠る光子ちゃんが、参列者の涙を誘った。

あれから三年、亮太に育てられた光子ちゃんは四歳になる筈である。きょう裕介は亮太と光子ちゃんに会うためにここへやって来たのだった。

「こつち方面に用事があつてな、近くまで来たで寄つてみたんじや」

裕介は笑いながら言い繕った。ガンになっていつ死ぬかわからないから見納めに来たとは言えない。いつ死ぬと医者に言い渡された訳でもなく、手術がうまくいって案外長く生き延びるかもしれない。ただ肺ガン食道ガンで長生き

している人を知らない。裕介が知る限り二三年で死んでいるのだ。自分の寿命もそんなもんかもしれないと思えるのだ。元氣なうちに会うべき者に会っておこう。そんな思いが強かった。亮太も元氣な俺の姿を見覚えていてくれ、そのうち俺はひどく萎れて縮んでしまうのさ。裕介は心の中で叫びながら、顔では笑っていた。

神殿に手を合わせてから、亮太と光子ちゃんをあらためて見つけた。亮太はすっかり白髪になり、額と頬の深い皺が歳より老けて見えた。

息子夫婦を失った痛手がもろに顔に出ている感じだった。亮太のズボンにつかまって背後から首を出した光子ちゃんは、丸顔の大きい目をしていて、亮太の幼いときのいたずら顔に似ていた。

神殿に上がる三段の石段に腰掛けて、裕介は神殿の前のわずかな境内を見渡した。いまはもう居ない白馬の小屋が、朽ち果てたまま残っていた。古びた絵馬は色あせていて、神社の歴史を物語っていた。参拝者も少ないのであろう。賽銭箱にはクモの巣がはつている。社務所も屋根がずれ落ちそうになっている。荒れ果てた社に一本の楠の大本とツバキの繁みばかりがつかまて春の陽光を受けて輝いていた。神社の衰退と植物の生命力、この皮肉な現象を亮太は心の中でどう受けとめているのだろう。

「ここもあと半年で終わるじや」

亮太が呻くように言った。

ツバキ神社が高速道路の建設計画の路線に引つ掛かつて取り壊されることになるらしい。亮太から手紙が来て、裕介は驚いた。神社の取り壊し反対の運動もしたが、都会から流れて来た新住民の多くは無関心で、年寄りも旧村の若者も少なくなった現状では、反対運動も盛り上がらなかつたらしい。市会で取り壊しと高速道路建設が決定したという。毛筆の立派な字が泣いていた。

社務所の奥の一室で暮らして居る亮太と幼子は、半年後には住まいさえ追われてしまうことになるらしい。市営住宅に優先的に居れて貰えるように市議員に頼んでいるが、どうなるか分からないと手紙にあった。どこまで付いていない亮太の人生だろう。順風満帆とは言えないまでも、それなりに明るい人生を歩んできた裕介には、一番仲の良い幼友達が苦勞ばかりを背負って歩いているのが辛かった。亮太をこんな目に合わせてしまったのは自分であるという強い思いが、裕介には常にあった。

高校を卒業した亮太は神官になる勉強を嫌って、中規模の靴下工場の事務員になっていた。

裕介は大学に進み、大学を卒業して商社に入って二年目に、父親が脳溢血で倒れ、突然死んでしまった。父の経営していた織物工場を手伝っていた兄は三十歳になったばかりで若社長になり、一手に仕事を任される羽目になった。

困った兄は裕介に商社を辞めて帰って来て工場を手伝えと言った。しかし兄に逆らって商社は辞めなかった。そのかわり兄を手助けして貰うために、亮太に靴下工場を辞めて兄を助けてくれと頼んだ。兄も気心の良く分かった亮太ならと言いい、靴下工場の時よりも高い給料で彼を引き抜いたのだった。亮太はすばしくて頭の回転も速い奴だったから、営業と経理を一人でこなさざる働きぶり、兄も大変喜んでいて。

十五年ほどして、バブルが弾けて世の中不景気になりました。その頃大手の下請け工場だった兄の会社には仕事は回らなくなってきた。従業員を減らし工場の機械も半分遊ばせる状態になり、金融引き締めで融資もして貰えず、とうとう手詰まりになって会社は倒産した。知らせを受けて戻って見ると、工場の門には鉄柵がはめられて大きな錠前がぶら下がっていた。

その前に放心状態の亮太が突っ立っていた。裕介は言葉もなく亮太を強く抱き締めた。

自分が亮太を兄の工場に引つ張らなかつたら、いまは一流企業に発展した靴下工場で、課長ぐらいにはなっていて、部長ぐらいに昇格して定年を迎える筈であった。それを思うと裕介の胸が痛かった。

借金を苦に、まもなく気の弱い兄は自殺して、工場は他人の手に渡った。

亮太は仕方なく死んだ父親の後を継いでツバキ神社の社務所に収まつた。神官の資格が無いので祭事的时候は他所から神主が来て神事は行われていた。

息子を失ひ孫と二人で細々と生きてゐる亮太に、裕介はいつも責任を感じ、負い目をしょつて生きてきた。

「まあ何もねえが、久しぶりで二人で酒飲まんか」

亮太は社務所の軋んだ戸を押して開けて、中に入れと裕介を首でうながした。

疊の縁が擦り切れてささくれだつた六畳間に座り込んだ。古びたタンス一つしかない部屋だつた。

「先に知らせてくれりや刺し身の一つも買つておいたによ」
疊の上に大きな湯飲みを二つ並べ、なみなみと酒を一升瓶から注いだ。裂きいかとピーナッツを袋から取り出すと無造作に皿においた。

「あの紙包みも開けるや、お前の酒のあてにと思つて蒲鉾と竹輪買つて来たんじや」

亮太は戸棚の上に置いた土産の包みを開けた。
「ほうゴボウ天やひら天も入つとるや」

「お前ゴボウ天が大好きじゃつたらうが」
亮太は大きく口を開いて、無造作に棒状のゴボウ天をほおばつた。それから一気に湯飲みの酒を飲んだ。

「ああ、うめえ、お前と酒飲むのが一番じや」

白髪頭を揺すつて、亮太は笑つた。

額にも頬にも黒くくすんだ深い皺が刻まれている。幼い光子ちゃんを目の前にして飲むいつもの酒は苦いものにちがいない。少ない年金で細々と生きてゐる亮太には孫の成長を眺める楽しさより、この子が独り立ちできる日まで守り続けなければならぬ責任の重さが身にしみていることだろう。早くに妻を失ひ、二十五歳の息子と二人暮らしだつた亮太が、いまは孫との二人暮らしなのだ。

「ほら、じいちゃん見て」

部屋の隅でおとなしく遊んでいた光子ちゃんが人形の金髪を櫛でときながら、亮太の膝に座つた。

「おつちゃんにいいの貰つたの、こんな高いもん、じいちゃんヒカリによく買つてやれんかつたで、よかつたのう」

「ベッドも椅子もあるよ。ほら、お皿もフライパンもナイフもあるよ」

光子ちゃんのはしゃぎながら走るようにして、玩具の一つ一つを亮太の前に並べ出した。

裕介は自分に孫の無いのをふと寂しく思つた。

息子は大学の研究室で猿の生態研究とやらに没頭して結婚する気などさらさらない様子だし、娘は結婚しているが、七年経つが子供に恵まれないでいる。世の中すべてがうまく行くとは限らないが、すべてがうまく行かなかつた亮太にいま生きる勇気を与えているのは、光子ちゃんというこの小さな命なのかもしれない。

「こいつが大きゅうなるまで、わしは死ねんでよ」

「そうじゃ、八十までは病氣などしておれんぞ、酒ばかり飲んでちやいかんぞ」

亮太は うんうんと深く頷いて自分に何かを言いきかせるようにした。

「それはそうと健一はどうしてるんぞ」

裕介は暗い酒になるのをはばかりて、話を切り替えた。
健一は悪がき三人組の一人だった。

「彼奴はもうボケてよ、自分の嫁も息子の顔もわからようになっちまってよ、どもならんわ。わしの顔見て、どこかで見た顔じゃがだれじゃとぬかしおる。亮太ぞというところらばら笑いよって亮太はそんな爺さんと違うじゃとよ」

「そんな歳でもないのにもうボケてるのか」

「彼奴とこは金持ちじゃで苦勞もないし、何もかも人にして貰って自分ですることといえぼモノ食うて糞たれて、あとは歯みがくことぐらいのもんよ。そいで早ようボケたのよ」
亮太の言いぶりがおかしくて、裕介は思わず笑ってしまつたが、幼友達が壊れて行くのがいまいましく思えるのだらう。もうすぐ俺もガンに侵されて壊れていつてしまうのだが。そう思つたとたん、裕介はギョツとして息を呑んだ。
「健一みてえみよ。ボケられたら何もかも考えんでどんなに楽かよう」

亮太が涙ぐみながら、酒をあおるように一気に飲み干した。

裕介は胸が詰まつた。亮太の体の中には自分が想像している以上に重くて堅い固まりがずしんとあるのかもしれない、裕介はそう思いながら、曲がつた背を一層曲げて首を垂れた亮太の横顔から目を避けた。

「じいちゃんおなか空いた」

あどけない声が沈んだ空気を切り開いた。

「ああそうかそうか、じいちゃんばっかし食うての悪かつたな、すぐ握り飯作つてやつからの。ちいと待てや」

亮太は満面の笑みを作つて狭い台所に立つた。

「朝の残りじゃがツクシの卵とじ食うか」

「懐かしいの。最近ツクシの生えてるのも見たことないな」

「都会で肉ばかり食うてるでボテボテ太っちよるじゃ」

そんなが案外ばてつと倒れるでな」

裕介はドキリとした。肉ばかり食らつてガンになつたよ。そう言いたいのをこらえて苦笑した。相も変わらず減らず口を叩く奴だ。幼友達の親しさだが、悪態つける元気が亮太の中にはまだ残っているのがかえつて嬉しかった。大きな握り飯五個と少し小さめのを三個皿に乗せてきた。

「ほうら、ヒカリの好きなジャコと昆布が入つとるぞ」

亮太は目を細めて、光子ちゃんの口に握り飯を半分に割つて入れた。ほろ苦いツクシは口の中で懐かしい昔を呼び起こした。

「お前、この神社壊れたらあとどうする積もりぞ」

「このチビがおらなんだら神社と討ち死にするところじゃが、そうもいかんでよ。住むとこ決めたら日雇いにでも行くさ。年金だけじゃ食うのがやつとだし、これからは家賃も要るでよ」

「この立ち退き料はいくらかでのじゃろ」

「なんが涙ほどよ。昔のように盛んじやつたらともかく、参拝客もない寂れようじゃ額もしれとるさ、体の続く限り働かんとなあ」

「大変だねえ」

「仕方ねえわさ。これも運命よ、なるようになるさ。そうでも思おて暮らさなきゃどうにもなるまいて」

亮太は酒をいつきにあおった。これも運命よつか、裕介は心の中でつぶやいてみた。寝る間も惜しんであくせくして来て、最後はガンであっけなく死ぬというのか。脳卒中であっけなくというのならまだしも、ガンでぢりぢりと身を細めて痛みと恐怖に苛まれながら死を待つなんて狂おしいかぎりではないか。

幼子のために病んでもいられず、死ぬまで働き続けなければならぬ亮太の人生も重く辛いものであらう。どちらがどうと比べることは出来ないが、好き放題人生を桜花してきたと思えば、付けが回つて来たと思えなくは無い。これと言った趣味もなく働くことが趣味であったような人生を過ごして来た自分だが、たいした苦難にもぶちあたらない

かったことは幸いだとすれば、いま直面しているガン宣告は神が我が身に与えた唯一の試練ということか。裕介は喉元を過ぎる酒の苦さに耐えていた。

「どうじゃ、川風あたりに堤防にでもいかんか、わんぱく時代を思い出しにさ」

うつとうしい話はこれで終わりとでもいうように、亮太は高い調子で言い放った。

「いいね。このあたりも随分変わったがまだまだ昔の名残はありそうだし」

裕介も口調を合わせた。重い心を振り払うように、裕介は膝をぼんと叩いて立ちあがった。

神社の裏側からあぜ道に出た。新芽が光った雑草を踏みしめながら、一列に並んで歩いた。先頭に歩く光子ちゃんは歩き慣れた我が道とばかりに走るように進んだ。神社の境内で拾ったツバキの花をポケットにたくさん押し込んで、頭の上にも花びらを乗せて嬉しそうにはしゃぎながら歩く。歩きたび赤い花びらがポロリポロリとあぜ道に落ちて行く。まるで道しるべのように。

「おっちゃん こっちこっち」

小さい手がひらひらと招く。ツバキの茂みの石畳で鉢合わせした時には怪しい奴と言った幼子が、すっかり懐いている。幼子とは何と単純で可愛い存在であらう。くねくねと道

を辿つて堤防に出ると、ひんやりとした風が顔を撫でた。

緩やかにうねつた川の流れに五階建てのマンションが六棟あった。春の陽光に白く光っていた。

「あれがお前とこの織物工場の跡地だ」

亮太が重々しい声で言った。二人にとつて苦い思い出が残っていない場所だ。二人は暫く無言でいた。

兄の仕事を手伝ってくれと頼んだ俺が此奴の人生を潰したのがあの場所なのだ。あの場所が亮太の不幸な人生の出发点となつてしまつたのだ。

川岸に向かつて建てられた六棟は、春の日差しの中で、昔の古い事など知らぬとでもいうように堂々と居並んでいた。

工場の窓を開けると川風が流れ込んできて、むうつとした機械の熱気と騒音がすうつとどこかに流されて消えるのだった。

子供のころは、機械の配列の中を兄とよく走り回つて、親父にいつも叱られたものだった。

閉鎖された筈の工場の一室で兄が首を吊つた。発見されたとき、亮太はまるで自分が兄を殺めたかのようにわしが悪いのじゃ、なんもかもわしが悪いのじゃと泣き叫んだ。

仕事の責任者だった自分を責めたのか、ノイローゼになっていた兄の行動を見張れなかったことを責めたのか、遺体の兄よりも気が狂わんばかりに泣き叫ぶ亮太の姿の方が傷ましかった。

悲しい思い出の詰まつたあの場所が、いま人々の穏やかな憩いの場所となつてゐる。明るい日差しと川風を部屋いっぱいを受けて、楽しい家庭を営んでゐるであろうマンションの住民を思い描いた。

「あそこにあつた桜の樹はまだ残つてゐるぞ。団地の庭になつてゐる。樹齢百年以上だから、もう立派な樹になつて花が見事よ。もう半月もすりや満開ぞ。毎年花見に行くんだわ」

亮太は笑いながら言つた。裕介は何となくほつとした。二度とあそこには立ち寄りたくないと思つてゐるのではないかと思つてゐた。桜の花が咲くと、夜桜の下で従業員の宴会が開かれた。其のときは悪がき三人組はいつも駆り出されて、提灯を釣る手伝いをした。テーブルやいすを運んだり、ムシロを敷いたりもした。花見弁当が出て菓子やジュースが貰えた。時間が経つと酒に酔つて踊りだす者もいた。そのころの思い出をたどりに行くのだろうか。裕介は亮太の頬骨の尖がつた横顔をまじまじと眺めた。

「きようはこつち泊まりか」

亮太が言つた。

「うん、墓参りでもして帰ろうかと」

父も兄も突然死に、母は兄嫁に支えられて長生きしている。そうとはいへ、いまは老人ホームに入つてゐる。もう兄嫁のことも定かでなく、兄が残した息子を兄だと思つて

いるらしい。

九十二歳になるのだから仕方もないだろうが、俺を見てもたぶん誰かわかるまい。

ホームの費用は裕介が出しているが、母はそんなことは知らない。いつまで長生きするか知らないが、ひよつとして自分の方が先に死ぬことになるかも知らない。ボケているからこちらが先に死んでも母は心の痛みを感じることはないだろう。その点はこちらが案ではあるが――。

兄嫁には自分がガンであることを知らせておく必要がある。まとまった金を義姉に預けて母を頼んでおきたいとも思っている。

「お前はもうここには戻らんのか、いつまであくせくするんじや。ここへ戻つてのんびりすればいいもんおよ」

亮太の声が重々しく心に響いた。

「まったくその通りだったよ」

「だったってどういうことじや」

亮太が怪訝な顔をした。

裕介は言葉に詰まった。食道ガンであることを亮太に話したいと喉まではい上がつてきた。しかしそれを言う訳にはいかな。幼子を抱えて必死に生きている亮太を落胆させるわけにはいかな。

「確かに働き過ぎたと思つていふということさ。古希を迎えたら戻つて来てのんびりするさ」

裕介は言葉を繕いながら、古希までもたない自分の命を思つた。

「ヒカリ 危ないからこちらにおいで。川に落つこちるぞ」
亮太が叫んだ。

川辺に群がっている菜の花の中で蝶のように戯れていた光子ちゃん、素直に出て来た。見ると手に何やら持つている。よく見ると幼子の手には菜の花の長い茎が何本も握りしめられていた。連れそうな足取りで、小さな体ごとクルクル舞ながら二人に近付いて来た。そして大きく一回転するなり、

マハルバマハルバクルルン アブロスバブ
ロストロロンローン じいちゃんじいちゃん幸せ
になーれ

そう言いながら地面に座っている亮太の頭上に、菜の花の長い茎をぽんと当てた。黄色い花びらがばらばら亮太の白い頭に降り注いだ。

おそらくテレビのマンガが何かに出てくる魔法使いの少女のまねごとだろう。菜の花の呪文、菜の花の長い茎は魔法の杖。

亮太はおどけ顔で頭上の黄色い花びらを指先でつまんで見せた。それから笑いながら幼子を引き寄せ強く抱き締めた。いとおしそうに何度も頬擦りする亮太の白髪に黄色い花びらが光っていた。それはなんと満ち足りた光景だっ

た。いまの亮太にとつては孫との戯れの一瞬が何よりも幸せな時間にちがいない。

じいちゃんじいちゃん幸せになあれか。

裕介は心の中で幼子の口調をまねてみた。

その言葉の意味もおそろくわからないであらう幼子が、無意識の中で亮太に幸福を呼び込もうとしている。裕介にはそう思えた。

「おじちゃんもクルルンクルルンして欲しい」

光子ちゃんがつぶらな瞳でのぞきこんできた。

裕介は笑いながら大きく頷いた。

この子が運んで来た黄色い花びらが頭上から降り注げば、ガン細胞が急速に小さくなり消えて行きそうな錯覚に陥っていた。

青い空にむかつて菜の花の長い茎を高くつきあげた光子ちゃんは、呪文を唱えながら縫れるような足取りで裕介の周りを回り出した。春の光りの中で舞う幼子の姿は、まるで妖精のようにゆらめきながら輝いていた。

――完――

鳥語 五十三号 の合評会を

二〇〇六年十一月中旬までに開催の予定です。

場所とくわしい日時は、後日連絡します。



鳥語社

23歳・秋

東築史樹

1
浩子は成田を飛び立った。
夜だった。

眼下に東京の街々が、赤いルビーのリングのように、あるいは銀色に光るパールのネックレスのように輝いていた。目を遠くに放つと、関東の平野が黒々とひろがり、そこに白や黄色の光点が、ブラネタリウムの星々に似て散らばっていた。

やがて機は暗黒の海へとかかる。

浩子は、窓外に放っていた視線を機内に戻した。少し眠っておかなくてはと思う。

海外に出るのは、これで三度目である。

初回は中学生の頃、父に伴われてのロシア旅行だった。新潟から船でナホト力に向って。

そのときは、今、心に抱えているような不安はなかった。何もかも珍しく、彼女は好奇心にあふれ、船内を歩きまわった。

ロシア人の船員は、白い肌に青い目をし、優しく微笑み親切だった。機関室や操舵室も見せてくれた。その部屋の開かれた窓から、彼女は去っていく日本を見ていた。生れて始めて、日本の地を離れる感慨があった。

水平線の彼方に、日本列島の山々が見えていた。少しずつそれは水面下に沈み、頂きだけを残してくる。稜線は次第にまばらになり、消えて行き、そして水平線だけになる。そのときの彼女には感傷はなかった。淋しさもなかった。むしろ、やがて舳の方に二十数時間後に現われるだろうロシアの地を思っていた。この船の着くナホト力の街ってどんなのだろう、という好奇心が勝っていた。

日本は、面から線そして点へと変わっていく、その消え方が興味の対象となるだけだった。

浩子は再び暗い窓外を見た。翼の先端の赤い灯が小さく揺れていた。

この機は十時間後、ニューヨークのケネディ空港に着く。今は好奇心より不安の念が強かった。

父母にすべてを任せたファミリー旅行と単独旅行の差、昼間と夜との差、好奇心の強い中学生と思慮ある大学院生との差。

それは言い方を変えれば、誰ひとり知り合いのない空港に一人おり立つ不安、英語だけで過す生活への不安、海外長期滞在の不安といえるものであった。

うとうとすると機内食に起こされた。不健康な時間につぎつぎと出てくる色あせた機内食は、十時間に及ぶ長い長いフライトを余計に長く思わせた。

幾度目を覚まして、ジェット機は夜の闇を飛んでいた。機の速さは地球の自転の速度なみたときいていた。友人の話を思い出す、午後六時に関空をたち、西まわりにヨーロッパにとんだ友人の話を。

「沈みかけの夕陽がいつまでも沈まないのよ。まるでずっと午後六時で、ヨーロッパに着いても六時で、これが時差かと実感したわ」

今、自分は日付変更線を越え、その時差を逆に飛んでいるのだ。太陽に向かい、朝をくり上げるように飛んでいる。それにしても夜明けが遅い。

機内放送が、アメリカの西部標準時を告げていた。胸の

鼓動を感じてくる。眼下の闇に、淡く灰白く光が見えてくる。北米大陸の光が。

最後の機内食が出てきた。食欲はなかったが、彼女は無理に食べた。体に活力を与えようとしていた。その活力が気持ちに及ぶことを期待していた。

そして遂に夜が明けた。座席前のモニターに地図が映しだされた。その地図上を飛ぶ機影が、ニューヨーク市に近づいて行く。高度が下り、街並みがはっきりと見える。浩子は胸がどきどきしてきた。

遂にケネディ空港が見え、滑走路が目の前にひろがり、小さなシヨックがあつて、機は着地した。

出迎えも知り合いもない空港に一人おり立つ自分。ここからアメリカでの生活がはじまるのだ。度胸をきめて、唇をきつと結んで、彼女は立上った。

2

浩子は可愛かった。

地元、大阪の今宮戎に福娘として選ばれるほど可愛かった。そして、すっかりしていた。

テレビ出演など諸行事に、その福娘代表になるほど、すっかりしていた。

これが大学一年次のことであつた。

二年次、国連の軍縮平和会議が大阪で開かれた。そこに

参加し、各国の青年にまじって働きながら、そのような場に、どこか魚が水を得た自由と明るさを感じていた。

三、四年次、就職のことを考えはじめた。女子の自立が男子のそれに比して難しい日本社会で、しかも不況という現況で就職への不安を感じていた。

浩子は明るい顔立ちをしていた。高校時代はコーラス部所属で、声も明るくまろやかだった。そして顔つきも明るくまろやかだった。ちよつと目立つほど長いまつ毛をし、柔らかな臉の下に、まるいものおじせぬ瞳が輝いて優しい光を放っていた。

「人を幸せにする顔だわ」と友人は言った。

「福娘に選ばれたって、なるほどね」

浩子は大学院に進んだ。

漠然と自分の中に芽生えていた希望が、次第に形をなしてきた。

国際関係——もつと具体的にいえば、国連に勤めたいという希望だった。

さしあたっての目標は、国連のインターンシップ・プログラムに参加することである。

大学二年次に経験した国連の大阪会議で概要を知り、ずつと心のどこかで温めてきたものであった。

この企画は、世界各国の大学院生を対象にした公募で、希望者は開始時期の半年前に選考試験を受けなくてはならない。

例年世界で千人以上の応募があり、採用は百名程度で、十倍を越す高倍率である。

インターンは無給だった。渡航費、ニューヨークでの滞在費、保険料など、すべて私費である。勤務場所が市の中心部であるため滞在費は高額であり、行く前に十分な資金を準備する必要があった。あまり安い方法を選ぶと危険を伴う怖れがある。

したがって浩子の日常は大変だった。

英語の研修、受験勉強、その諸手続に加え、資金調達のための家庭教師、塾講師などのバイトに精を出し、多忙をきわめた。

そこに大学院での研究が加わる。

しかし、彼女の福娘のような表情はあまり変らなかった。

3

空港におりた浩子は、シャトルバスに乗ってウエストサイドのYMCAに着いた。

予定していた宿とは連絡がとれず、渡航二日前に、やつとここに一時的な宿泊契約をしたところであった。

風紀悪く危険だときいていたYMCAだが、ざつと見たところ外見は悪くない。位置もよく、セントラルパークやリンカーンセンターまで徒歩数分、人通りも多く、カフェもある。

それがちよつとした安心で、中に入ると、これも予想以上に綺麗で、若い学生風、ファミリー、善良そうな、あるいは偏屈そうなおじさん達がいて、普通の景色みたいで、浩子はかなり安心した。

しかし、フロントで名を告げると「予約ありません」と素っ気ない。しかし彼女は途方にはくねなかった。くれる余裕もなかった。ここが駄目でどこへ行けと言うのか。その必死のおももちが通じたのか、係の老婦人は無表情のまま、八階のキーを渡してくれた。

ところが、この八階が大変なしろものであった。

扉も壁もうす汚れた白ぬりで、なにか刺戟的なほこりっぽい臭いがした。浮浪者風パージョンが屯している。その間を抜けるように、部屋番号を探して辿る。

不運にも、なかなか見つからない。奥の奥らしい。何人かの老人が、ぶつぶつ言いながら通りすぎて行く。廊下を曲ると、アジア系の男が窓枠に坐って、足をぶらぶらさせながらじつとこちらを見ていた。怖い。

だいたいYMCAのイメージは「世界各国からの若者、学生が集い合う場」じゃないのか。違う、この階には学生なんかいない。日本人もいない。平均年齢五十歳、六十歳が住んでいる。

部屋は予想通り汚く狭かった。ぎりぎりスーツケースを開くスペースしかない。ベッドと机とチェストはある。ト

イレとシャワーは共同。リネン類の清潔そうなことだけが、ささやかな救いだ。これで一泊六十ドルだって、八千円もするなんて。東京でもそれくらい出せば、部屋に電話と冷蔵庫とテレビぐらい備えたユニットバス付のビジネスホテルに泊まれるはずだ。ここには時計もない。

浩子は大いに不満だった。そして大いに不安だった。部屋から廊下に出るのが怖い。扉の向うを誰かが通っていく。自分がこの部屋にいることを悟られることすら恐ろしい。しかし、バスぐらいは使いたい。

彼女は耳を澄ませた。外の気配を確かめ、そつとドアを開けた。周りを探り、人影のないのを確かめ、超スピードで部屋を出た。

辿りつく女性用のバス。黒人の年配女性が一人。これまたぶつぶつと独り言をいつている。際限なく言っている。

こわごわシャワーを使い、「明日には絶対別のホテルに行く」と体を洗いつつ決め、部屋に走り戻ると、小さく安堵し、長旅の疲れがどつと出て、とりあえず爆睡した。

翌朝、目ざめて頭ははつきりしたが、忽ち不安が甦り、いくらなんでも、せめて別の階に変えてもらおうと意を決して室外に出た。

また向うに、うろろろしている人影がある。すれ違つてふり返り「普通の人じゃないのか」先方もふり返つて目が合い、ちよつと微笑みあった。五十歳ぐらいの銀髪的女性

である。カナダ人、バンクーバー出身、留学している息子に会いにきたのだが、と彼女も怯えていて、それで二人そろってフロントへ直行した。

「アップグレードでよければ」と今度は若いくりくりした目の青年が言う。

「いいです。いいですよ。アンドリユー君」浩子は嬉しくなつて勝手に名づけた。

「八階以外なら」

結局、一泊八十ドルの部屋に移ることになった。カナダの老婦人とも隣どうし。安心、心強い。渡された鍵を見ると、134号室、

「八階ではない。OK」

十三階でエレベーターが開いたとき、そして部屋の扉をあけたとき、浩子はまさに感動した。きれいな、明るい。そして廊下ですれ違う人たちが普通！

部屋はバス、トイレはないが、セミプライベート式。

夜、はじめて人心地でベッドに入ったが、しかしよく考えれば、バストイレ共同で、一日一万円はあり得ない。一か月泊まれば三十万円。これは破産だ。一日も早く新しいアパートを探さねば。

明日から部屋探し、頑張るぞ。何か目標ができた気持で、彼女は快く寝についた。

浩子はニューヨークの東、クイーンズ地区に住居を見つけた。

2Kのアパートである。南部にケネディ空港、北部にラグーデニア空港があり、西側にはマンハッタン島。国連本部まで地下鉄で二十分の距離だった。

浩子は国連の建物の前に立っていた、そこに林立する加盟各国の旗を見ていた、感動していた。

写真で見知っているたたずまいそのままだという感動だった。「この中に私はこれから入って仕事をするのだ」

例えてみれば、山好きの人が憧れの山に面したときの感動に似ていた。事前にその山の写真を何度も眺め、その山に関する記述を読み、想像の上で何度も踏み入っている。(そこに今現実には接しているのだ)

あるいはまた歴史好きの人が史跡に面した感動に似ていた。予備知識があるほど、憧れがあるほど気持は高まってくる。(ここであの事件は起きたのか。ここで彼が倒れたのか)感慨は建物の内部に入って一層強まった。

そこには、代々の事務総長の写真が飾っており、反対側には三万博めいて各国の特産品が並んでいた。ここまでは観光客の立ち入れる領域だが、その向うにセキュリティがあり、バスのチェックを経て国連の住民となる。

極端に言えば、浩子は廊下一つ歩いても感動していた。

なりかけている。まず積極的に友たちづくりをしなくては」

5

しかし、浩子には本当はそんな決心の必要はなかった。

彼女は天然自然に人懐っこかった。人見知りもしなかった。

最初、彼女の興味をひいたのは、アンリというフランス青年である。

緑色の目をしていた。麗しいという表現がびつたりの緑で、明るい光の下では、若草色、薄暗いところでは深い海の色になった。

したがってメトロの駅で、最初彼と交した個人的な会話も瞳の色についてであった。

まじまじと見つめる彼女に、アンリは何度も、なぜ、なぜと不思議そうに尋ねてきた。彼が横を向くと透きとおってビー玉みたいになり、動くにつれて微妙に色合が変わり、見あきない。

しかし、これはあまりに礼を失っているのではないか。

浩子は懸命に我慢した。そして遂に瞳の色を話題にすることを思いついた。その間、心ゆくまで眺めることが出来そうだった。

フランスでは、緑の目は「蛇の目」といわれていると彼は言った。ちなみに茶色の目は「豚の目」、青い目は「恋人の目」だとか。そして浩子を見て、黒い目と黒い髪は美し

くチャーミングだと優しく笑った。

みながお互いに好意を示しあう中、ヘレンというフランスの女性だけは、明らかに浩子に悪意を抱いていた。悪意とまではいかずとも、好感をもっていないのは明らかだった。

浩子を見無視し、あたかも居ないかのように振舞った。浩子がインタン仲間と連れだつているとき、彼女はこちらにこやかな目を向ける。しかしその目は、浩子のところだけ素通りした。

ヘレンはかつて日本で働いたことがあり、そこで悪印象を得たらしかった。日本人は自分たちだけで垣根をつくり、排他的だと言った。

ヘレンが自分を嫌うのは仕方ないにしても、協力してやるべき国連の仕事で、連絡が来ないなどというのは不都合なことであつた。それで浩子は彼女に言った。仕事の連絡だけは無機能的でいいから保つてほしいと。それから私はあなたに排他心を抱いていない。むしろ仲良くしたいと思つてい

る。浩子がこの国連の場、国際的な場で心がけていたのは、自分にされて嫌なことは相手にしない、そして、自分がさだけ嬉しいことを他人にするということだった。たつたそれだけの行いで、彼女自身が救われる気のすることがあつた。

ヘレンが夜勤できなく困っているとき、浩子は気軽に代役をひきうけた。

彼女は一階の国連総会ホールに行き、各国代表の席に隣

接して設けられた場に坐った。同時通訳のイヤホンをつける。流れてくる英語を聞きとり要約していく。

多くの国は紙面に書かれたステートメントを出すので、後で確認できるが、配らない国もあり、自国語で記されている場合もありで、とにかくこれは必要なことであつた。

二、三聞きもらした箇所が出て、前後の文脈から意味を考えていると、アンリが来た。

彼は浩子のメモを眺め、ペンを出して空白部分をすらすらと埋め、悪戯っぽく笑つた。

「あの国の環境と国情なら、まあこんなところでしよう」
「理知的に無造作という印象を受けた。考えれば彼にはずつとそんな印象をもっている気がした。」

アンリはみなの中で、どこか、すつと離れていた。冷静とか超然とかでなく、ただごく自然にみなに融けこまなかつた。みなが口を開けて笑っているとき、一人だけ口を閉じて笑っている。そんな印象があつた。

浩子に対し優しくあつたが、間に膜のはられている気がした。その膜は柔軟で、いくらでも傍に行けるのだが、しかし彼は相変らず膜の向うにいた。

それは少し淋しいことであつた。

6

浩子は街角のカフェテリアの椅子に坐つて、行き交う人

を眺めていた。

肌の色、国籍、信仰、言語、貧富などあらゆる点で異なつた人々が忙しげな足どりで歩いて行く。

これだけ異なつた人たちのつくる社会、その共通点は人間として守るべき法律だけなのだ。すると法の前ではすべて平等というデモクラシーの精神が、まさに自然に培われてくる。

「何を考えているの」向いに坐るフランツが声をかけた。
同じ軍縮局のインターンで、オランダ出身だつた。浩子と同じクイーンズ区に住んでおり、国連への行き帰りによく出会つた。

人懐っこい丸顔に、うるんだ感じ易そうな目をし、親近感をおぼえた。アンリが膜の向う側にいるとすれば、フランツはこちら側にいた。

「デモクラシーについて考えていたのよ」

「デモクラシー？」フランツはおかしそうに笑つた。浩子もおかしくなつた。

「日本とアメリカの違いについて考えていたのよ」と言い直した。漠然と底流でそれを考えていた気がした。

向う三軒両隣の、同じ肌、同じ言語の人々。選挙民も被選挙民もみな同じ肌、同じ言語の国、日本。

「そんなことを考えたりして、ちよつと郷愁を感じませんか」
浩子は、おやと思つた。話題が情の方に振れた。向う三

軒両隣の人たちの顔が浮かんだ。両親や家族そして友人の顔も。

「本当にそうね」

そのまま、浩子は少し日本の話をした。すると彼もオランダの話をした。

話題はプライベートになり、親近感がました。家族のことを語る彼の顔は暖かかった。

浩子はフランクと一緒に食事をしたり、映画を観、ディ斯科に行くようになった。二、三週を経て、二人は急速に親しくなった。

愛が芽生え育った。

彼はアムステルダム富豪の子で、そして、浩子は日本の普通の家庭の子であった。

「ぼくは今まで、自分のしたいことは常に親が助けてくれたし、失敗したときにも助けてくれた。言いかえれば、ぼくは自力で何かをしたことがない」

浩子がバイトに忙殺される学生生活を語ったとき、彼はそう言った。

「強い健気な浩子」

一ヵ月、そしてさらに半月、愛は続いた。

しかし、フランクにはオランダに恋人がおり、浩子には日本に恋人がいた。そしてオランダの彼女は、期間の後半、親光をかねてフランクの許に来ることになっていた。

それはちよつと、つらい別れだった。双方、在オランダ在日本の相手と手を切り、この地で培った双方の愛を貫こうとする。霧のハドソン河でそんな風になれば、いわば映画の一幕コマみただが、二人は名残を惜しみつつ最後の別れをした。

7

ハローウィンが近づいてきた。

傷心の浩子は、友人に誘われるまま、みなが集いに顔を出した。

そこでカールというドイツ青年に出会った。同じインターン仲間でも部局が異なり、今まで見知らぬ人であった。日本語で話しかけられ驚く浩子に、彼は「日本に留学していました。K大学です」と自己紹介した。

ごく自然に日本の話になった。短いセンテンスをつないでいく。余計な形容詞がない。そのすつきりした語調が快かった。

浩子には、フランクが心の鬱積として残っており、頭の運動のような彼との会話が癒しになった。

二人はよく話をするようになった。外見はフランクの位置にカールがついたみたいだが、フランクは彼女の胸に住み、カールは頭に住んでいる具合であった。

彼との会話では、議論はあくまで議論であり、感情の方

に振れたりしなかった。

「これは、私の国ドイツでも同じだが」という前置きで、彼は日本の民主化の未成熟を分析したりした。

江戸時代から明治大正へと、ずつとお上に治められてきた人々、昭和になって専制はさらに厳しく、戦前、戦中へと続き、戦後与えられた民主主義を、綱領かスローガンのようにとらえ、いまだ政治は三流といわれる日本と、そんな政治家を選ぶ日本人々々。

浩子もそれは判った。特にこのアメリカ、ニューヨークの地にいると肌で判る具合だった。

十七世紀、イギリスから脱出してきた人たち。このアメリカ東部の地で、初めて自分たちの土地を持ち、自分たちの国をつくったのだ。もめごとの解決や、共同生活のルールづくりにみなが集り、討議をしながら、きまりをつくり上げていったのだ。それがこの地にすむ人たちの体にしみ入っている。

「でもね、カール」と浩子は言った。彼ら欧米人と違った価値観が、この東洋日本にはあることをつけ加えたかった。「例えば、あなた方の国、西欧では、権力の集中を避けるため、三権分立をつくった苦難の歴史があるでしょう」

しかし日本では、昔から、ごく自然に二権分立になっている。祭、政が天皇、幕府という形でずつと続いている。

「それに、法律でもそうなのよ。701年につくられた大

宝令が明治になるまで変えられなかったなんて、特にあなたの国ドイツでは信じられないでしょう。必要になれば例外規定をつくって間に合わせていたなんて」

これは会話というより意見交換だった。

双方に教えられるところがあり、それが向上であり、遊戯であり、そしてまた疑似恋愛でもあった。

8

浩子の国連での仕事に新しい分野が加わった。

月間レポートの作成で、これは世界各国の有力紙からの情報や、軍縮局内部に配信されたニュースに基づき、アジア太平洋地域の軍縮情報、当該センタールの活動について三、四枚程度にまとめるというものであった。

その月の初日に遡って情報を集めなくてはならない上、ウラン濃縮やプルトニウム抽出の核関連実験を秘密裏に行っている国もあり、それが露呈という重大事件がからんで、非常に忙しくなった。査察状況や周辺国の反応など調べることも多く、夜の十時過ぎまで一人オフィスに残る日が続いた。

しかし彼女は国連の場で、こうして働いている自分が楽しかった。仕事にやり甲斐を感じ、職員やインターン仲間への好感度もました。軍縮局という故か、みなは平和に、にこやかに優しく、そして浩子も、にこやかに優しくあった。いつしか彼女にはサンシャインというあだ名がついていた。

みなに明るく接していく。人を幸せにする顔は、ここでも通用して、日本の福娘は国連のサンシャインとなった。

浩子は歌が上手だった——というより、歌唱力があつた。

高校時代に所属したコーラス部は、全日本合唱コンクールの常連で、それだけに本格的に鍛えられていた。卒業後も声楽の個人レッスンをうけ、いわば素人はなれをしていた。

ハローウインの集りで披露したのがきっかけで、それ以後、ちょっとした集いの場でも、しばしばリクエストされた。小さな部屋で、例えば『ビューティフル・ドリーマー』を歌うとき、その高音部分で窓ガラスが小さく共鳴するのではないかと思えるほどの音量があつた。

イタリア出身のピサロが誕生日に浩子を招待した。彼のために浩子は『オーソレミオ』を歌った。その後、彼女はそつと背後から抱きしめられた。髪の毛に唇をつけ「君が好きだ」とピサロはその髪の中で言った。

浩子はびっくりしたが、そんなに驚きでもなかった。彼が好意を抱いていることは折りにふれ感じていた。抱きしめられながら、彼女は優しく、そして曖昧な言葉を探した。彼を傷つけたくはなかった、自分も傷つきたくなかった。

大学時代、男の学生に人気のある友人がいた。浩子の目から見ても、魅力的だった。ときどき顔触れが変わるが、崇拜者にことかかなかった。「私は博愛主義者なのよ」だか

らみなに少しずつ愛を注いでいく、彼女は浩子にそう言っていた。

「サンシャインとどう違うのだろう」

そんな友人の生き方に若干の批判を感じていた浩子は今思った。

ニューヨークで、国連の場で思った。

「ここではみな、私をスイートだとか優しいとか言ってくれるけど、私の優しさは実感としてはみな私に対する優しさの反映に過ぎない気がする。嫌な人には私も冷たく接するだろう。その意味で私は博愛ではない。ただ多分理解のウイングが広いのだ」

これが彼女の自己省察であつた。いろんな人の心理が理解の範囲内にある気がしていた。したがって、誰かに悪意をもつということが殆んどなかった。包容力というのはなく、包容力が心の寛やかさを意味するとすれば、彼女は頭が寛やかなのであつた。

それは、彼女の可愛い顔や、チャーミングな歌声とあいまって、多くの人を惹きつけた。

9

人間関係のひろがりのみならず、期間の後半で、彼女の気持は、より国連へと傾斜していった。

それは将来国連で働きたいという強い希望に由来していた。

国際的な場で活躍できる力、言語力、知識、交渉、コミュニケーションの能力、多様な価値観をうけ入れる器量をもちたいと思っていた。

そんな彼女の目に触れるのは、国連の中での日本の立場の脆さだった。

このインターン一つを例にとってみても、世界各国からの参加数百余名の中で、日本人はたった一人、自分しかない。

その目で周囲を見ると、日本人スタッフは実に少数だった。財政面で多大の貢献をしているが、人的貢献に乏しかった。

浩子はこれを情報センターのN氏に訴えた。

昼休み、館内のレストランに誘われたときだった。初老の穏やかな表情のN氏は、はじめ微笑をうかべてきき、途中から思慮深い目になった。

「日本でも、多くの若い人が国連関係の情報を得て、積極的に職務経験をつむことが重要だと思います。」

食後のデザートに好物のチョコパフェをご馳走になりながら、浩子は言った。パフェの味は悪くなかった。

「そのためには、情報活動、奨学金制度、語学研修を行い、大学研究機関が積極的にインターンシップを必須単位として推進することが必要ではないでしょうか。」

N氏は背いた。私、こときを相手に真面目に背いていると

彼女は思った。

「在東京の国連広報部にそのご意見伝えます。さしあたってはWebのページに、公式インターンのリンクをはりましょう」

そんなN氏に浩子は好感を抱いた。

「またご意見きかせて下さい」別れぎわにN氏は言った。そして目元を軽く微笑ませた。

「あなたはサンシャインと呼ばれているそうですね。日本のためにも頑張ってください」

10

浩子は読んでいた本から顔を上げた。

クイーンズのアパートの一室である。窓外に公園の緑が広がっていた。白い建物が薄く濃く点在している。

ニューヨークに来て、国連の仕事に忙殺されながら、読書をしている自分。

「これは一体なんなのか」

読書を始めただけではない。朝七時にきちんと起きる。料理をつくる。よく歩く。部屋とオフィスはいつも整頓されている。こまめに花を買って部屋を飾る。週末には必ず洗濯と掃除をする。洗いたてのベッドシーツやブラウスにアイロンをかける。自分で時間をきめてダンスのレッスンに行く。歌、ピアノもやる。

日本にいたとき、特に院に進んでからは、浩子はこんなことをしなかった。

する気はあつても、つねに他のことに手がいつばいで、そんな悠長なことに費やす時間はなかった。たまに「悠長な時間」があると思えるとき、やりかけてみても、決してそれが生活のリズムとして定着することはなかった。つねに「暇がない」と言い訳してきた。

しかしニューヨークに来て、誰に言われるまでもなく自然にこうしている自分がある。そして判つたのは、日本では「本当に」そんな時間と余裕がなかったということだ。遅くまで勉強する。昼に起きる。料理をする時間も余裕もない。掃除もたまにしかない。夜、車で大学院に向き、帰らない。自分のスケジュールが人並みに戻るのには、バイトのときだけみたいである。

「バイトの時だけ、なんて」

院生という独特のスタイルも影響している。ニューヨークで仕事してみても判つたのだが、ここではオン、オフがはつきりしている。もちろん何があつても毎朝早くから出勤しなくてはならないし、時間的な拘束は圧倒的に多いが、仕事が終われば解放され、休日は休むことが出来る。

しかし、大学院での生活は、オン、オフの境目が無い。朝でも夜中でも、休日でも平日でも、とめどもなくやらねばならぬものがある。向上心が全くなくなるという限り、解

放されることはない。

院での研究は、大学までの勉強と異なり、自己満足の世界ではない。プロフェッショナルの人々と肩を並べて行こうとする点で、むしろ仕事に近い。院生が自分の勉強不足で他人に迷惑かけないという責務を負っているとするれば、研究活動は休まる暇もなく、時をおう毎に深みに嵌って行く。そしてそれらを金銭面でサポートするためのアルバイト。これも時を追う毎に深みに嵌って……。

彼女は日本での生活を、ある種の感慨をこめて振り返つた。懐かしさがあり苦しさがあつた。励みがあり、痛みがあつた。

「いや、もう止めよう」

今、ニューヨークにいる中に、日本でしらすしらすに失つていた自分を、できるだけ多く発見することを楽しむのだ。

11

インターンの任期が後一カ月になった頃、誰いうとなく、自分たちの各国からのインターン生でミニ国連をやってみようという話がでた。

一種のお別れセレモニーである。

議場は国連総会第一委員室があてられ、最終月の第三日曜に行うことになった。事務局の許可もとれた。

テーマは世界の平和と核軍縮と決つた。

各国代表は、それへの決意と抱負、実績を述べるのだが、必ずしも全員賛成というわけではなかった。

例えばロシア人のタチャナは乗り気でなかった。彼女は国で推薦され、国費で派遣され、このインターンを一種のノルマと解釈しているようであった。ノルマを達成すれば、次の地位と報酬が約束されている。

そんなシステムの一段階とみれば、余計な仕事の増えるのは嬉しいことではなかった。

個人的には彼女は、ちよつとひたむきな感じの善良そうな女性だった。

「ターニヤと呼んで」と彼女は浩子に言った。

ロシア民謡を通して二人は親しくなった。『カチューシヤ』とか、『灯』とか、浩子の好きな曲であった。ターニヤはバラライカを持っており、伴奏してくれた。新しい曲も教えてくれた。アルコールが入ると陽気になった。

「ターニヤは総会で何を発表するの？」

「できればバスさせてほしいわ」と彼女は、そばかすのうく白い顔をしかめた。「でも、どうしてもというなら、対テロ問題かしら」

チエチエンの紛争を例にひいた。浩子は見解を異にしていた。あれは民族自決の闘いではないのか。

と、ターニヤは厳しい顔になった。険しい顔と言ってもよかった。ロシアという国家への体制批判とうけつつも

たいだった。可愛いターニヤが厳しいタチャナになった。

浩子は話題を変えた。自分の発表するテーマに話を移した。「実は、私も何を言おうか迷っているのよ」と相談をかけた。「ヒロシマ……」

ちよつと考えて、ターニヤは言った。

「日本は唯一の被爆国でしょう。毎年世界大会をやつているときいているわ。それについて話したら」

たしかに日本は、広島、長崎、そしてビキニ環礁の福留丸と三度の被爆を体験している。そして核禁止世界平和大会を行っている。しかしこれは、浩子にとってテレビや新聞で見知っている知識にすぎなかった。

浩子はターニヤと違って、ミニ国連に乗り気だった。積極的に参加したいと思っていた。しかし、日本国代表として、語るべき何もなかった。

彼女は、そんな自分にちよつとびつくりした。数日鬱であつた。サンシャインに雲がかかった。

「どうしたのですか」机を並べるコスタリカの青年が尋ねた。ミニ国連に話題が及んで、

「日本には非武装の憲法があるではありませんか」と言った。

「それについて発表しないのですか」

コスタリカが非武装のことは浩子も知っていた。

「ほくは、自分の国が国をあげて、その国是をどのように護ろうとしているか、語ろうと思う」

彼女はその言葉にちよつとショックをうけた。日本では官民一体、国をあげてその平和憲法を護ろうとしたことがあるだろうか。それを護つていくために何か手をうたれたことが。戦後六十年間、護憲をかかげる政府が殆んどなかったというのは驚くべきことだった。彼女の印象に残る日本政府は、憲法を邪魔にしていた。憲法記念日の行事は常におざなりであり、この憲法を変えたがっていることが見え隠れしていた。

そして国民も、憲法を護れという声はきくが、護るためにこうしようという声をきいたことがなかった。そして浩子も叫んだことがなかった。

「自分には発表すべき実践が何もないのだ」

彼女は過去の自分を顧みた。すると高校時代に観た「人間を返せ」という映画を思い出した。原爆によつて生命が抹殺され、精神が蝕まれ、人間の尊厳が失われていくという「十フィート運動」による映画であった。

その運動にずっと関つてきた友人がいた。浩子は彼女とコンタクトをとった。その体験を日本における一女性の活動として、紹介しようと思つた。

12

各国代表が次々といく発表を、浩子は議場中央のやや右よりの席に坐つてきいていた。

いつもは側方の席にいて、一語もききもらすまいと記述しているのだが、今はゆったりと楽しく、ときに退屈し、ときに興深く、ときとして真剣に、ときに笑いながら聞いていた。先進国といわれる国々の発言より、アジア、アフリカ諸国、そしてバルカンの小国の発言の方が興深かった。インド代表はネールについて語り、ボスニア代表はチトリーについて語つた。核大国に対して平和を求める非同盟中立の話であつた。それらは1955年のバンドン会議における平和十原則に結集され、インド、トルコ、サウジアラビアなどアジア、アフリカの二十九か国が参加していた。また、バルカン諸国からは、中欧非核武装案の話があつた。これは1957年の国連第十二回総会で決議されたもので、ポーランド、チェコ、東西ドイツと北欧の四か国が参加していた。

現在国連の場で、そのような結果が見られないのは悲しいことであると、彼ら代表は言つた。これは古くて新しい問題である。個々ばらばらな平和希求の諸勢力が、この国連の場で結集し、連帯を培う土壌として、大きな花を咲かせ、力となり得るのではなからうか。

少しづつ、浩子の登壇の時間が近づいてくる。

緊張はするが、胸の動悸は感じなかった。

福娘やサンシャインと関係ある気がしていた。

気持が自分の方に向かず、外に向っている故だと思つた。

己にとらわれ、いい格好を見せようとする。——そんな
気持と正反對の、語る言葉がどうすれば抵抗なく他者に受
け入れられるか、論旨が一人よがりになっていないかなど
に、気持が向っている故だと思つた。

「日本では、若者や市民たちが行っている反核活動に十フ
イート運動があります」浩子は話し始めた。「これについて
私の友人の体験をのべたいと思います」

1979年、日米両YMCAの協力で広島、長崎におけ
る米軍撮影の未公開フィルムが日本に送られてきたこと。
まだアメリカで眠っている七万フイートにのぼるこの種の
フィルムを日本に取りよせ公開すべく、市民の間に十フイ
ート運動——みなが少しずつ金を出しあつて十フイートず
つ買つていく——が起つたこと。その結果ぞくぞくとフィ
ルムが買いこまれ「人間を返せ」「予言」「歴史」という映
画に編集され、市民グループの自主上映で、各地で公開さ
れたこと。

浩子は、それを遂行していった友人の努力、苦勞を語つ
た。と、質問があつた。

「それで、日本政府は、それにどのように関わつたのか」

彼女は言葉につまつた。しかし、日本政府には、こうあ
つてほしいという希望をもっていた。自主上映の側面援助、
政府文教機関、教育機関での上映、さらに、多くのコピー

をつくり、国連事務局をはじめ、世界各国の政府、図書館、
学校関係の寄贈など。

「今の民間の形でも、贈られた幾つかの国の市民から、次
のようなメッセージがよせられております。日本のみなさ
んの努力に感謝します。皆さんの尽力のおかげで、核戦争
を避けることの一步がふみ出せます。あるいはまた、恐ろ
しい映画です。この私たちの恐怖感を組織して、大きな平
和への力にたかめたい、などです。」

私は将来、この国連の場で働きたいと思つていますが、
こうした活動の紹介を通じて核軍縮の進展に貢献できれば
と願つています。

私は今ここで軍縮委員会に所属しています。各委員の方
々も、このフィルムによつて非常に心を動かされることを
確信しております。また、このフィルムを各国政府、国会
議員の人たちが見れば、必ずや核爆弾を二度と使わないと
いう決意を改めて認識されるであろうことも確信しています。
私自身、ささやかな力をその平和への努力に注ぐ覚悟で
あります」

「よう、サンシャイン」会場から誰かが言つた。

13

浩子はセントラルパークにいた。

国連ビルを出て、アベニユーを西に二筋、ストリートを

北に数条上った位置にあった。

初冬の澄みきった空に、シャープなスカイラインをみせて高層建築がそびえていた。

景色はすつきりとしているが、大気は十二月に入ると、めつきり冷たくなった。ハドソン河からビルの谷間に吹きつける風が、公園でひろがって、辺り一面寒々としていた。日本に帰ると思うと、懐かしさがあり、淋しさがあつた。懐かしさは、例えば母に対してだった。日本から送られてくる小荷物には、いつも食物がどつきり入っていたが、頼んだスカートはたったの一枚だった。これでこそ浩子の母であり、無事帰ると無条件に喜ぶであろうその顔と気持が無条件に懐かしかった。

淋しさは、例えば自由の地を離れる淋しさに似ていた。

ここでの自由は、いわば自然の中にいる自由だった。

人種のもつばという雑多な人々の中にいる自由——いろいろな言語、価値観、目の色、肌、髪の様子が混然と存在する中の自由は、いわば虹の七色が混ざると無色になるのに似ていた。

日本から来た浩子には、特にそれが感じられた。日本のような単色の世界では、その色への強制が有形無形に働きかけ、少しでも異なると、はみ出してしまふのだ。

目の前で数枚の枯葉が舞っていた。一、二枚はベンチの前を通り、他の二、三枚は小さな花壇の石づみに沿い、止

ったり動いたりしながら、あちこちに消えていく。

この地で知り合い愛し合つたフランツ、疑似恋愛のカール、好意をよせてくれたヒサロ、友だちだったアンリ、最後は仲良くなつたヘレン、歌友たちのターニヤ、彼らの傍が、あるいは強く、あるいは弱く、浩子の心を横切つていった。

彼らとはまた会えるだろうか。

会おうとすれば、みな日本から十数時間の行程であり、物理的には決して遠くはないのだが、心理的には遥かに遠く、もう会うことはないと思えた。

「ただ、いつの日か国連の場で会えるかもしれない」

日本に戻れば、浩子には就職試験が待っていた。外交官をめざすための国家公務員の試験が。それに先立つて、このインターンシップの報告を大学に提出しなくてはならない。それから修士課程修了の論文にとりかかる。その上、今回の資金うめあわせのため、またバイトに精を出す必要がある。

この国連インターンシップに踏み出したとき、浩子は新たな成長に向つてのワンステップと思つたが、今、日本に帰るということも、また次のステップへの踏み出しの気がした。

『道程』と彼女は思つた。それは2004年秋の期間の道程であり、二十三歳秋の浩子の道程であつた。 完